

## 異文化との葛藤：「個人的自我」と「集団的自我」

吉村，治郎  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1654382>

---

出版情報：言語文化叢書. 9, pp.147-153, 2004-02-20. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 異文化との葛藤

——「個人的自我」と「集団的自我」——

吉 村 治 郎

### 1

1915年に出版された小説 *The Rainbow* 以後、ロレンス文学は二律背反的傾向を一層強めていく。例えば、キリスト教と異教の相克、理知と直感・本能の闘ぎあい、文明と自然の対立、そして現代世界と古代世界の対比などがそれである。ロレンスは両者を対決させたり対比することでそれぞれの特質を明らかにするのであるが、大雑把に一からげにするならば、理知の対極に置かれている直感・本能、そして文明の対極にある自然などはキリスト教的観点からすれば非キリスト教的な要素、すなわち異教的なものといえる。これは、キリスト教と異教の対比が物語るように、ロレンスが異教を強く志向していたことの表れといえる。ロレンス文学とは、その意味で、異教的な目で、キリスト教を精神的支柱とするヨーロッパ文明の特質を明らかにしようとする試みといえる。特に、その否定的側面を抉る彼の舌鋒は鋭い。また、異教という、いわばキリスト教の外に立ってヨーロッパキリスト教文明を眺めているゆえに、キリスト教内部にいる者には見えない点も鋭く指摘しているともいえる。こうした異文化的な目でキリスト教文明を再考するところにロレンス文学の存在理由の一つがあるといってもいい過ぎではない。

現在、世界を支配している文明は、いうまでもなく、ヨーロッパキリスト教文明である。キリスト教国はもちろん、イスラム圏や仏教圏においてさえキリスト教文明の所産である進んだ科学技術、医学、民主主義など、生活万般においてその恩恵に浴し、各国とも工業化とか先進化、さらには民主化という名の下にそれを積極的に取り入れる努力をしている。いわば世界の国々は自国の民族性に執拗にこだわる一方、少なくとも一面においてはヨーロッパ文明一色に染まりつつあるといえるだろう。従って、ヨーロッパ文明の功罪を鋭く抉ったロレンスの指摘はヨーロッパという彼岸の問題ではなく、等しく、異教徒であるわれわれの問題でもある。しかも、ややもするとヨーロッパ文明を崇拝する余り、それを無反省に絶対視し、善なるものとして受け入れてしまう傾向がある。いわば功のみに目を奪われ、その罪に盲目的になる傾向がある。そのような現在にあっては、ロレンスの文明断罪はより一層傾聴に値する。とりわけ、我意の暴走や愛の不毛など、現在いたるところで顕在化しているヨーロッパ文明の破綻を考えるにあたってロレンスの洞察は興味深い示唆を与えてくれると思われる。そこで、本論ではロレンス文学の本質ともいうべきキリスト教と異教という二つの文化の葛藤という観点から、両文化と密接な関係を持つ「個人的自我」(“individual self”)と「集団的自我」(“collective self”)<sup>1)</sup>の問題を論じることとする。

ロレンスに *Apocalypse* という評論がある。彼は 44 歳で亡くなるが、この書物はその一年後の 1931 年に出版された思想書である。福田恒存氏はこの書物を評して次のように述べている。

.....人間を造りかへる力をもった書物のいふものは、さうめったにあるものではないが、この『アポカリプス論』はさういふまれな書物のひとつである。すくなくとも、ぼくはこの一書によって、世界を、歴史を、人間を見る見かたを変へさせられた。<sup>(2)</sup>

福田氏の指摘は決してロレンス最良の大袈裟な賛美ではない。*Apocalypse* は世界、歴史、人間に対するわれわれの従来の固定観念を一変させ新たな認識へと導く力を持った書物といえる。この書物は形式的には、『新約聖書』の最終章である *The Revelation* すなわち「ヨハネ黙示録」を論じるという体裁をとっている。当然、主眼は「ヨハネ黙示録」に対する論評であるが<sup>(3)</sup> それに関連して、人間、キリスト教、およびその歴史等に対するロレンスの思想が純粋な形で表出されている。その意味で、先行の *Psychoanalysis and the Unconsciousness* および *Fantasia of the Unconsciousness* と同様、ロレンスの思想を集大成した著作といえる。本論で論じる「個人的自我」と「集団的自我」についてもこの書の論点の一つである。

ロレンスはこの書の中で、「個人的自我」と民主主義との関連を論じているが、一読してまず驚かされるのは民主主義が実に明快に否定されていることである。身分や富の有無にかかわらず、万民は等しく平等の義務と権利を持ち、多数決を原理とするこの社会形態を非なるものとして否定する者はまずいないであろう。それは、身分制度に縛られた封建時代の不自由さと比較すれば自由平等精神を標榜する民主主義はまさに理想的な社会形態の一つであることは一目瞭然である。にもかかわらず、ロレンスは安易には肯定しない。ロレンスの民主主義否定は人間に対するロレンスの認識と密接な関係があるからである。

ロレンスは *Apocalypse* の冒頭において人間には「古いアダムの要求」(“the old-Adamic need”) が存在していることを指摘している。つまり、人間は自己の治める世界において、そして手の届く限り広範に、支配者となり、主となり、栄光ある存在になろうとする欲望を持っている<sup>(4)</sup> という。そして、この欲望は「愛を欲するよりも、パンを求めるよりも」強い<sup>(5)</sup> としている。しかし、これは単に野心家のみに見られる本能ではなく、一般人はもちろん、貧困からくる卑屈さに蝕まれた、社会の底辺にいる人たちも等しく共有する本能としている。ロレンスは英国の炭坑夫をその一例としてあげている。階級社会である英国の最下層に属する炭坑夫も一度坑内を出て我が家に帰ると、小さいながらも一国一城の小君子として妻や子供にかしずかれ、あたりには権力者の気が漂う。そして男の顔には権力者さながらの倨岸と不遜の影が射し、そこからくる満ち足りた表情が浮かぶという。すなわち貧者でさえ、卑屈であることはあっても、決して謙遜であった例は無いというのが彼の主張である。彼は次のように述べている。

.....and the poor may be obsequious, but they are almost *never* truly humble in the Christian sense——<sup>(6)</sup>

ロレンス自身炭坑夫の息子であった。従って、炭坑夫のそうした面を幼少よりつぶさに観察し、身をもって体験したことだろう。その結果得られた生々しい認識であるゆえに説得力もある。ロレンスにあっては、おそらく謙虚ぶる人はいても真実謙虚な人というものは稀であり、一般的には存在しないのである。人間はいずれかの方法で、また自分の所属するいずれかの集団において絶えず権力と栄光を備えた宰領者たろうとする。人間は徹頭徹尾、主我的存在なのだ。ロレンスによれば、真の謙虚さを持つことができるのはキリストや仏陀のごとき一流の精神を備えた人間のみである。もっとも、そのキリストでさえ権力欲を持っている点で二流の精神を持つ大多数の凡俗となんら径庭はない。ただ一流の精神はそれを抑える強力な自制心も併せ持っている点で異なる。つまり、「古いアダムの要求」とはすべての人間存在の深奥に根ざす本能的要求といてよいであろう。逆にいえば、人間であることの証しであり、生の原動力ともいえるであろう。ロレンスはむしろ、権力欲を悪と決め付けているのではない。それを露骨に追求することは疑問であるが、そうした欲望があることに目をつむり、糊塗することこそ問題であり、その欺瞞的行為こそ問題なのである。ロレンスは事実を事実として自覚する必要を説いているのである。権勢欲旺盛な人は人間が権力志向型の存在であることは先刻周知の事実といえるが、ロレンスはさらに一步踏み込んで、一見謙遜に見える、いわゆる敬虔なるキリスト教徒を自認する人たちの心にも権力欲の存在を認めるのである。ロレンスは幼少より、謙遜ぶるキリスト教徒には反感を感じていたという。謙遜という仮面の背後に紛れも無い独善性と世俗的な権力欲を見てとったからである。それにしてもこのエピソードはロレンスが幼少よりいかに潔癖で一途な性格の持ち主であったかを物語っている。

では、人間はどのような時に生の充足感を得るのであろうか。ロレンスによれば、それは、先に述べた、人間存在に根源的に備わっている権力意識が満たされる時である。しかし、こうした充足を得るためには、種類と規模はどんなものであれ、自己の権力の及ぶ集団、すなわち、人と人が密接に結ばれた連関体を必要とする。言い換えれば、他者との連関がなければこれを実現することは出来ない。がっちりとした権力機構が整えられた封建社会では、これは比較的容易であった。つまり上から下にいたる、縦割りの権力的連関がすでに整えられているからである。人は、その権力機構のどれか一部に属していれば、ほぼ自然に自らの権力意識を満足させることができた。しかし、民主主義社会ではそうは行かないとロレンスは考える。民主主義社会とは全体よりも個人のほうに尊重を置く。個人は我意にのみに注意を払い、めいめいその個性と独自性を主張しあう社会である。個人がそれぞればらばらに自己主張する結果、個人は他者との連繋を失い孤立した存在とならざるを得ない。そして、孤独を癒すために群衆の中に分け入れれば入るほど孤独感は一層募る社会となる。人々が連関を喪失し、孤独を運命としなければならぬ社会、それが、ロレンスの目に映じた民主主義の実像であった。そして、この我意の本体である自我をロレンスは「個人的自我」と呼んでいる。またこの自我は社会生活を営む上で目覚める自我と考えられるので、これを「社会的自我」と言い換えることもできるが、このような民主主義社会においては男女の愛も、キリストの説く隣人愛も不毛である。というのは、「現代の男女は個人として以外に自分自身のことを考えない」<sup>(7)</sup> からである。従って、現代の民主主義社会において個人が生きるとは、他の人が行うことに絶えず干渉し、妨害することで自己の力を主張することに他ならない。人と人との間には連関もなければ相互の理解もないのであれば、個人の自己主張は他人にとっては迷惑

な干渉となるのは必至である。また、自己主張できるのは当然、強者である。従ってその干渉は弱者へのいじめとなる。ロレンスは、こうした弱いものいじめこそ民主主義社会の実情であると述べている。

This is the condition of modern democracies, a condition of perpetual bullying. <sup>(8)</sup>

ロレンスにとって民主主義社会とは、個人と個人の連関の欠如と孤独が支配する社会である。そして、その欠如の元凶となっている小我ともいうべき「個人的自我」を主張することを自由であり、独自性だと勘違いしている社会であるといえる。ところで、ロレンスがキリスト教に完全に埋没した人間であれば、このような認識は生まれなかったであろう。ロレンスがキリスト教という枠から一步踏み出し、全体を鳥瞰する目を持っていたからこそである。その目とは異教的な目であることはいうまでもない。ロレンスは「理知」よりも「血」のほうを信仰したことは周知の事実である<sup>(9)</sup>。一方、キリスト教は「血」、「肉」、「本能」を人間のもつ「闇」として排斥し、人間のうちなる「光」として「理知」や「精神」の方へ人間の意識を集中させようとした。ロレンスはまさに、キリスト教が締め出した「血」や「肉」といういわば、キリスト教から見れば異教的観点から人間を眺める視点を持っていたからこそ、キリスト教を母体とする民主主義を外から見ることができたのである。しかし、ロレンスは本質的にはキリスト教徒である。それは、人間を「理知」と「血」という二分法で理解する点のみでも明らかだ。「理知」と「血」という二分法はキリスト教特有の「霊」「肉」二元論に符合するものだからである。ロレンスは異教的世界への強い志向をもってはいるが、キリスト教は依然として抜きがたい桎梏としてロレンスの精神を繋ぎ止めていたことは確かだ。

### 3

「個人的自我」の対極にある「集団的自我」とはどのようなものであろうか。この自我は人間を取り巻く自然と密接な関係を持つものであることは *Apocalypse* の前半を見れば明らかである。「古代文明がわれわれと同じ眼で太陽を見ていたと考えるべきではない」<sup>(10)</sup>と述べ、ロレンスは自然や宇宙に対する古代人と現代人すなわちキリスト教徒の態度の違いを指摘している。つまり、古代人は太陽を「壮大なる実体」<sup>(11)</sup>として感得し、そこから力と光輝を授かり、見返りとして敬意と栄誉と感謝を捧げる。一方、現代人は太陽を「燃焼するガス球体」<sup>(12)</sup>としか見ない。いいかえれば、本能や直感という肉体的意識が豊かな古代人は太陽を生きた実体として捉えるのに対して、現代人はそれを「ガス球体」という科学的知識としてしか眺めないのである。これは現代人と太陽の間にはもはや生命的な交流は存在しないことを意味する。このような認識に立つロレンスは現代人がコスモスを失った原因をキリスト教に求めている。キリスト教は人間の理知と精神を称揚し、肉体を悪として締め出す傾向を持った宗教だからである。ロレンスによれば、キリスト教は誕生以来、二千年に渡って、人間の肉体を排斥し続け、人間の直感や本能を枯渇させたという。<sup>(13)</sup> その結果、キリスト教徒は外なる自然世界のみならず、自己の内なる自然からも切り離され、狭い精神世界に閉じ込められてしまったのである。こうした閉塞状態を打開するためロレンスは脱出を試みる。それは古代

異教の世界への脱出であることはいうまでもない。ロレンスが注目したのは、先に古代人の例で見たように、古代世界や異教の世界における人間と太陽との間にある生命的な交流であった。古代人や異教徒はキリスト教とは別の意識世界で生きていることに気付いたのである。そして彼は古代と異教の世界に澁刺とした「血の意識」の発露を見た。ロレンスのいう「集団的自我」とはまさにこの古代人の持つ「血の意識」のことである。ロレンスにとって、直感や本能こそ人間と太陽等を繋ぐ架け橋となるものなのである。彼のその他の評論、例えば *Psychoanalysis and the Unconsciousness* および *Fantasia of the Unconsciousness* などではしばしば“inner self”、“otherness”、“impersonal self”という言葉が出てくるが、これらは、すべて「血の意識」の別名であって、同じものを指している。「血の意識」とは人間内部の深奥に根ざす「意識」であるので“inner self”「内なる自我」と表現され、理知とは異なる次元の「意識」なので“otherness”「他者」という表現をとり、人間の意志の埒外に存する「意識」であるために“impersonal self”「非人格的自我」と表現されていると解釈できる。問題の「意識」が「集団的意識」という表現をとるのは、この意識が太陽との連関を形成し、両者の間に一種の連帯性を現出するからと考えられる。またこの「意識」は人間と太陽などのコスモスとの霊交を可能とする点から、「コスモス意識」と呼ぶこともできる。ロレンスは「個人的自我」を超越し「コスモス意識」とも言うべき「集団的自我」に目覚めることを勧めている。

さて次に問題となるのは太陽に代表される宇宙や、自然界との霊交の意味である。ロレンスはその作品の中でいくつも霊交の場面を描いている。例えば、*Lady Chatterley's Lover* では夫人が森の中で雛鳥と不思議な霊交を体験する。*The Rainbow* の冒頭では天と地の交流と、マーシュ農場における牝牛と男たちの血の交歓が描かれている。さらに、*Women in Love* では、作者ロレンスの分身ともいえる Birkin は桜草の上を裸で転げ回る。そして、ひんやりとした植物の感触を通して安らぎと癒しを受ける。さらに、ロレンスは *Birds, Beasts and Flowers* という詩集において、知識としての生命ではなく、鳥、動物、そして花に顕現する実体としての生命との出会いを詠っている。特にこの詩集に収められた *Snake* という詩は、蛇という一生命との神秘的交歓を描いた出色の作といえるだろう。<sup>(14)</sup> これらはいずれも古代世界や異教の世界と同質世界への回帰を示唆するものである。古代世界では太陽のみならず、自然界全体が単なる物質の世界ではなかった。太陽は人間を越えた実体として君臨し、信仰的さえなつた。月は夜の女神であった。自然界の景物は一木一草に至るまで神性が宿り、生命としての煌きを放っていた。古代世界とはロレンスにとって、いわば汎神論的世界といつてよい。そこは、生と死と再生のリズムが支配する世界である。人々は自然界や宇宙における人間の地位を体験的に知っていた。古代人は自然界の一生命としての自覚を持ち、自然界における人間の分をわきまえていた。人間は自然界に君臨する存在ではなく、その他の生命と同列であることを知っていたのである。そして、人々は自然界と生命的連関をたもちながら、人間を超越するものを頂点とする秩序の中で生活を営んでいた。「集団的自我」に目覚めるとは、まさにこのような世界へ回帰することである。自然の秩序へ参入し、それを受容し、自然界の一存在という、本来の姿に立ち帰ることといえるだろう。そして自然界を貫く厳粛な掟である生と死と再生という神秘に出会うことである。<sup>(15)</sup>

ロレンスにとって民主主義はその理念とは裏腹に個人を生かす社会制度ではなく、実は「個人的自我」を無制限に解放することで無秩序と孤独を醸成する温床にしかすぎなかった。しかも「個人的自我」言い換えれば単なる「我意」を主張することを自由であり、独自性であるという錯覚を与える制度であった。つまり、人間は他と連関する時、生の充足を得るとするロレンスの「生命主義」をぶつけると民主主義は無残にも敗北し、たちまちその欠陥を露呈するのである。ロレンスのこのような「生命主義」はしばしば「神秘主義」という言葉で言い換えられることがある。しかし、この「神秘」という言葉は「理解不能」の言い換えであることが多い。果たして彼の説く「生命主義」は理解不能なことであろうか。民主主義との関連で考える時、生の充足こそ人間の生存理由であるとするロレンスの「生命主義」は明快な説得力を持つように思われる。ロレンスの「生命主義」に照らせば、現代における愛の不毛、個人間の断絶、孤独など、様々な問題の原因が根本から明らかにできることを考えれば、一層、その感が深い。

「生の充足」を求める切実な思いはロレンスを異教の世界へ、そして古代世界へと向かわせるが、それは、小賢しい理知とは無縁な古代人が太陽に向かう時のように無垢の存在となって大自然に分け入ることであった。そして自然への参入を可能にするものが「集団的自我」であった。これは「血の意識」ともいうべき意識であって、「個人的意識」よりさらに深層に存する原初的な生命の炎ともいえるものである。ロレンスは、「集団的自我」のレベルまで降下して行って自然界と「血の交歓」を体験することは、人間存在にとって万巻の書を読破するよりも意味のあることと考えるのである。彼は、いつ終わるともわからない我意と我意のぶつかる中で傷つき、病み、疲弊した現代人の活路を自然への参入に求めたといえる。*Apocalypse*の最後を飾る次の言葉は自然へすべてを託す切実な思いがこもっている。

Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen. <sup>(16)</sup>

しかし、異教的な自然への思いが切実であればあるほど、キリスト教の重圧が一層重くロレンスにかかっていたということもできる。彼の中では異教への強い憧憬と二千年という重い歳月を持つキリスト教とが拮抗していたことは想像に難くない。その意味で、彼の文学は二千年の伝統を持つキリスト教とロレンス自身の異教的資質の葛藤のうえに成立している文学といえる。

## 注

- (1) D. H. Lawrence, *Apocalypse* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1980), p. 123.
- (2) 福田恒存, 『現代人は愛しうるか』(東京: 筑摩書房, 1975), p. 17.
- (3) ロレンスによると「ヨハネ黙示録」は抑圧者に対するキリスト教徒の復讐と支配を叙述しており, 愛を説く聖書のほかの部分とは異質な対照をなしているという。
- (4) Lawrence, *Apocalypse*, p. 20.
- (5) Lawrence, *Apocalypse*, p. 20.
- (6) Lawrence, *Apocalypse*, p. 8.
- (7) Lawrence, *Apocalypse*, p. 123.
- (8) Lawrence, *Apocalypse*, p. 123.
- (9) D. H. Lawrence, "Letter to Earnest Collings," 17 Jan., 1913, in *The Portable Lawrence*, p. 563.
- (10) Lawrence, *Apocalypse*, p. 27.
- (11) Lawrence, *Apocalypse*, p. 27.
- (12) Lawrence, *Apocalypse*, p. 27.
- (13) Lawrence, *Apocalypse*, p. 30.
- (14) 吉村治郎, 「異文化への脱出」(『英語英文学論叢』九州大学, 2004)
- (15) Lawrence, *Apocalypse*, p. 126.

## 参考文献

- D. H. Lawrence, *Fantasia of the Unconsciousness/ Psychoanalysis and the Unconscious* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1975)
- D. H. Lawrence, "On Human Destiny," in *Phoenix II*, ed. Warren Roberts and Harry T. Moore (1968: rpt. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1978)
- D. H. Lawrence, "Birds Beasts and Flowers," in *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, ed., Vivian De Sola Pinto and Warren Roberts (London: Heinemann, 1972)